



憂さ晴らしに書きなぐってみる

いくら美しい場所に行ったとしても、

いくら贅沢なディナーをしたとしても愛する人がそこに居なかったら空しすぎる。

愛なしでは何も達成できないし、全てが無意味。

すべての人に愛とロマンスを。

そこである詩を書く。

海辺のテラスへと続く道

「海辺のテラスへと続く道」

あの光に満ちたテラスに行けば、後悔の念や苦痛もなくなるから。

きっと心から消えそうもない愛していた人のことも忘れることができるから。

そこはあの坂を下った路地裏にあるはず。

名前の知らない人が住んでる家の赤い花が咲く植木を目印にして、

右に曲がったら両脇を白いペンキで塗られた細い道が続く。

そこを蝶と同じペースで歩いてゆく。

暑い直射日光で乾燥した空気がそこにかしらに立ちこめる。

真っ白な道。色彩が失われたように思えるほど眩しい光。

そこにたどりくぐっていけばたどり着ける「海辺のテラスへと続く道」

ある朝の光

「ある朝の光」

午前四時。
君は立ち上がって世の中を抱きしめようと努力する。
だけどそれは大き過ぎて受け止める事が出来ない。

しかし、その地平に昇った太陽は全ての家々に光を降り注ぐ。
彼女の愛のように、誰彼と差別する事もなく。

きっと普段は気にも止めないあの路地裏の道にも届くだろう。

僕の部屋にある窓辺の水槽に光が屈折し、部屋のあちこちに反射する。
水槽で浮かんでいた魚たちは僕より先に起き、少しずつ泳ぎ始めて、告げるだろう。

「愛はそこにある。気がつかないだけ」

モノトーンだった僕の世界では光の反射で色彩が現れ、
物事は輪郭だけで判断するのではないと知る。

事実を形象する事が光の輪郭だとしたら、感情を計るのは色彩なのだと。

割れたガラスの破片。傷ついた心のパレード。砂浜に描く自転車の影。
この世にあるのは思い出と経験だけ。

まだ誰も知らない道の心の領域に進み、解決策を探ろう。
この世は愛の飢餓。貧困は物理的な物に限って言える事じゃない！